

新旧のメリハリを利かせて、売る。

「コンパクトシティ」やTMOなど、中心商店街の活性化をめざした様々な取り組みが、全国各地で続けられている。かつては地域繁栄の目安とも言われた中心商店街の存在は、マイカー時代の到来や郊外型ショッピングモールの増加などによって大きく変化してきてはいるものの、まちづくりの大きな求心力の一つには変わりない。今回の『流通・通』は、今年の陽春から初夏にかけて訪ねた“古くて新しい”商店街の話題から。



仲見世通りで みたらし団子を食べながら...

ここで言う“古くて新しい”とは、誰でも知っている商店街で、今も人通りが絶えない街とでも言っておくでしょう。

まずゴールデンウィークに訪ねたのが、東京・浅草の仲見世通り。筆者が東京で過ごした学生時代以来の、久しぶりの参拝であったが、通りの雰囲気は今も昔も変わっていない。団子を焼くしょうゆの匂い、土産店員の呼び込みの声…。浅草寺から漂う香の煙とあいまって、日本情緒たっぷりの風情が訪れる人を和ませてくれる。

懐かしさにつられ、みたらし団子としょうゆ煎餅を頬張りながら、土産店を覗く。あるある、場所柄外国人が好みそうな浮世絵や富士山が描かれた扇子やTシャツなどなど。学生時代と違うのは、立ち寄る外国人の国籍ぐらいか。最近では欧米人よりも中国や韓国などアジア系の観光客が多く、一見すると日本人と見間違えるため、雰囲気的には以前と変わらない風情を感じるのかもしれないが、よくよく観察すると細かな時代の変遷を見つけることができた。たとえば、木片やシールに名前が書かれた名札。素材やデザインはそれほど変わらないものの、刻まれた名前には現代風のものが多く、顧客のニーズにうまく対応できている。ほかに、

昔ながらの構図を活かしつつ新しい素材やキャラクターを取り入れたグッズなど、浅草・仲見世通りの特徴を殺さずに時代の変化を取り入ようという品揃えや工夫の跡は少なくない。

竹下通りで クレープを食べながら...

次に訪れたのは、東京・原宿駅前の竹下通りである。かつては若者たちに人気のショップが建ち並ぶ一大スポットだったが、その様子は今も変わっていない。筆者の学生時代と変わったとすれば、集まる若者たちの世代が低年齢化していることと、キャラクター系やコスチューム系の店が目につくことぐらいか。とくに、人気バンドにあやかったコスチュームショップの多さが新鮮だ。老若男女、孫の手を引くお年寄りの姿も見受けられたほか、以前本人も足しげくかよったと思われるお母さんと娘の、いわゆる“友だち親子”の姿も少なくない。

竹下通りで変わらないものの代表格は、クレープかもしれない。道端にしゃがんでついばむカップル、買い物袋を片手に歩きながらかじる少女たち…。筆者も懐かしさにつられ、つつい真似をしてしまったが、クレープの味と食べ歩きが無邪気さは、今も昔と変わらなかった。時代の変化の中にも変わらない楽しさを見つけ喜びに浸った、竹下通りでの一日であった。

ジャンジャン横丁で 串かつを食べながら...

6月下旬には、大阪へ。大阪と言えば、道頓堀、なんば、北新地など名だたる通りが点在するが、今回訪ねたのは通天閣の南側にあるジャンジャン横丁だ。界限には、いかにも大阪らしい風情が残る。庶民派俳優の演劇小屋、囲碁や将棋の寄り合い所…。筆者が訪れたときも、劇場前で公演を終えたばかりの俳優たちが、“おばちゃん”相手に握手や記念撮影の真っ最中。入場料も、公演時間が5時間前後で1,000円という安さ。まったくもってサービス精神旺盛な土地柄である。もちろん、観客の中には若い女性の姿もチラホラ。一方、囲碁や将棋の寄り合い所は、ほとんどが“おじいさん”たち。隣接の天王寺動物公園帰りの親子連れやカップルの姿も入り混じり、通りには老若男女があふれていた。

ジャンジャン横丁の名物と言えば、「串かつ」である。夕方も4時過ぎになると、すでにお客が店の前に並ぶほどの人気だ。いかに大阪の人たちが“ソースもん”が好きとはいえ、行列を作るほどの愛着をもっているということか。今回紹介した昔ながらの風情を残した、今も人気の商店街たち。「守るもの」と「変えるもの」のメリハリが利いていて、古さを感じさせない魅力が息づいていた。

経営コンサルタント 岩淵公二
(ジーベック代表取締役)